

## 知 識 探 訪

## 多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

## ローレンス・ウォン氏がシンガポールの首相に就任

市岡卓 (流通経済大学共創社会学部国際文化ツーリズム学科・教授)



シンガポールのウォン新首相 (同氏の公式フェイスブックより)

2024 年 5 月 15 日、ローレンス・ウォン氏がシンガポールの第 4 代首相に就任した。前任のリー・シェンロン首相が 04 年に就任して以来、約 20 年ぶりの首相交代である。

ウォン氏は、1972 年 12 月生まれの 51 歳で「第 4 世代指導者」の一人である。元官僚で、財務省などで勤務し、リー元首相の秘書官を経験するなど頭角を現して、2011 年に政界入りしている。一般家庭で育った「非エリート」とされる。バイクを愛し、ギターを弾く趣味人で、庶民的でフレンドリーな人柄と評されている。

20 年 3 月には、新型コロナウイルス禍の国会での演説の途中、医療関係者など献身的な働きをした人々に触れるところで、声に詰まり、涙を流し、しばらく演説が途切れるという場面があった。こうしたことも、「人間味のある温かい人物」という好印象につながっていると思われる。

ウォン氏は 20 年 1 月からコロナ対策の政府タスクフォース (特別作業部会) の共同委員長を務め、国民に向けて政府の対応策について説明し、存在感を高めた。22 年 6 月からは未来の国家のあり方を模索する官民対話「フォーワード・シンガポール」をリードし、「国民の声を聞く政治家」としてのイメージを印象づけた。

今回退任したリー氏は、現在 72 歳である。リー氏はもっと早く退任するつもりだったが、首相候補と公認されたヘン・スイキヤット財務大臣 (当時) が、21 年 4 月に年齢 (当時 60 才) を理由に辞退したこと、また、コロナ禍を乗り切ることが優先したこと、交代を遅らせていた。この間、ウォン氏がコロナ対策や国民との対話で評価を高め、イメージアップに成功し、首相の座を確実にした。

建国以来 59 年近く政権に就いてきた人民行動党 (PAP) は、貧しかったシンガポールを一代で先進国に変えたリー・クアンユー氏のカリスマ性に統治の正統性を依存してきた。23 年には国立博物館でリー・クアンユー氏生誕 100 周年を記念する企画展示が行われるなど、同氏のカリスマ性を維持しようとする動きも見られる。しかし、こうした手法は長くは続けられないだろう。

ウォン新首相は、就任式の演説で「私たちは、より包摂的で、優しく、寛大になるだろう」と述べた。このように「包摂的な社会」という方向性を打ち出すことが、今後の PAP による統治の正統性を支えることになるだろう。また、政府のイメージをソフトなものにしてくれるウォン氏の「感じのいい人」キャラも、統治のための資源として活用されるだろう。

しかし、ウォン氏が言うように、シンガポールは「包摂的な社会」になるだろうか。政府の統治スタイルについてみれば、確かに現在では議会で野党が一定のプレゼンスを持つようになり、かつてのような露骨な野党の排除はみられない。ただ、フェイクニュース防止法 (POFMA) を通じたネットメディアの規制により言論の自由が制限される状況も見られ、形を変えて権威主義体制は続いている。

シンガポール政府の統治手法は「感じのいい」ものばかりではない。首相になったウォン氏は、どこまで「感じのいい人」でい続けることができるだろうか。

## &lt; 著者紹介 &gt;

1965 年、三重県生まれ。法政大学大学院国際文化研究科修了。博士 (国際文化)。法政大学大学院兼任講師を経て現職。専門は多文化社会論、シンガポールの民族・宗教関係。特にシンガポールの民族・宗教間融和政策、シンガポールのムスリム社会における社会問題に関心がある。著書に『シンガポールのムスリム 宗教の管理と社会的包摂・排除』(明石書店、2018 年 11 月) などがある。